

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	中西 麻一子（京都府）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 9 7 号
学位授与の日付	平成 3 0 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 2 項
学 位 論 文 題 目	カナガナハッリ大塔仏伝図の研究
論 文 審 査 委 員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 大西 磨希子（佛教大学教授） 副査 入澤 崇（龍谷大学教授）

### 〔 1 〕 論文の概要

中西麻一子氏の学位請求論文は、南インド、カルナータカ州の北部、グルバルガ県で近年発見されたカナガナハッリ（Kanaganahalli）遺跡の仏塔（カナガナハッリ大塔）を装飾するレリーフ石版に刻まれた仏伝図に対する研究である。中西氏は発掘中であったカナガナハッリ大塔を2009年に実地調査して、大塔の円胴部を装飾する59枚の上段レリーフ石板に記された碑文写真をすでに2011年に公刊しているが、本論文においては、レリーフ石板に描かれた仏伝図に焦点を絞り、個々のエピソードが説かれる文献資料と、大塔に刻まれた図像表現を比較して、それが仏教文献史上および仏教美術史上どのように位置づけられるのかを明らかにしようとした。本論の内容を章毎に紹介すれば以下の通りである。

序論 現地調査および2013年に刊行されたインド政府の発掘報告書に基づいて、カナガナハッリ大塔の概況、その造営過程、59枚の上段レリーフ石板の出土状況とその配列問題、59枚の制作年代、そこに見られる図像表現の特徴が一覧表と共に紹介され、本研究の研究方針が示される。

第 1 章《雪山地方への伝道図》カナガナハッリ大塔の上段レリーフ石板には 2 回の導入時期が認められ、1 回目は前 1 世紀のサータヴァーハナ朝時代であることが石版の上枠に刻まれた碑文によって確認できる。その時期に設置された 21 番石版には、聖者カッサパゴッタによる伝道図が表現され、対になる 22 番石版には、雪山夜叉とナーガによる礼拝図が描写されていることが明らかとなった。隣り合う 2 枚のレリーフ石板を用いて「高僧たちによる雪山地方への伝道伝説」の一場面が図像化されていることになる。紀元 4 世紀に成立したスリランカの史書『島史』に記される伝道伝説を遡ると、この物語は紀元前 3 世紀頃

にサーンチー大塔のあるビールサ地域を活動拠点にしていた西インドの上座部系仏教教団（雪山部）に属するカッサパゴッタ、マジマ、ドゥラビサラの伝道物語に由来することが分かる。『島史』が4世紀に成立するより前に、カナガナハリ大塔は上座部系の雪山部教団から同じ伝道伝説を受容したことが明らかである。仏教が西インドからスリランカへ伝播する経路上に大塔は位置していたのである。

第2章《誕生・灌水・七歩図》15番石板の下段区画にはブッダの誕生図が描かれている。さらに同箇所 の碑文から、灌水図と七歩図が刻まれていることも確認できる。この灌水図と七歩図は、現存する図像資料の中では最も早期の作例であり、新資料として初期インド美術の作例に加えることが出来る。これによってブッダ誕生時の灌水と七歩が、紀元2世紀には仏伝の一場面として語られていたという事実も示している。さらに、15番石板では、誕生→四天王の受け取り→灌水→七歩と、場面展開を順序立てて追うことが出来る。これと同じ場面展開を伝承する文献資料は、南方上座部のニカーヤに含まれる *MA-123 (Acchariyabbhutadhamma)*, *DA-14 (Mahāpadāna)* と *Jātaka Nidānakathā* の3文献のみである。この事実を考慮すれば、大塔の誕生図は南方上座部所伝のニカーヤと共通する図像表現であると言える。

第3章《出城図と頭髮礼拝図》09/05番と32番石板にはシッダールタが出家時に剃髪したことを暗示する頭髮礼拝図が刻まれている。初期仏教美術の段階では、ブッダ自身を直接描写することは開始されていないので、シッダールタの出家の瞬間を描くことは難しい。初期経典では動詞 *pra-Vraj* を用いて「〔世俗生活から〕出て行く」と表現された出家の描写を、図像に求めることは不可能であった。文献資料中にシッダールタの出家を<頭髮礼拝>として伝承する記述は、後の時代の *Buddhacarita* や *Mahāvastu* などの仏伝文学から始められたと言える。このような事情を顧みれば、本図は、文献資料に先行して図像資料がブッダのエピソードを制作した作例であると解釈することも出来る。また同様の現象が08番石版にも認められた。家から「出て行く」という表現に基づき、さらに神々を登場させてより文学的に発展させた出城伝説が古代仏教美術で図像化されるようになり、それが仏伝文学中に収められるという過程を辿ることが可能である。これによって、文献資料と図像資料に共通した題材で保存された仏伝のエピソードは、無関係に成立したのではなく、相互に影響を与え合いながら成立、伝承されたものであり、本図はそれを具体的に示す例となる。さらにこの頭髮礼拝図と出城図が両者ともバールフット、サーンチー大塔の図像表現を継承していることも明らかである。

第4章《初転法輪図》初転法輪伝説を図像化したものには、初転法輪自体と鹿野苑における法輪柱供養を描いた2つのタイプが存在する。この2つは大塔のレリーフにも認めることが出来る。前者は01番石版の上段区画に描かれている。これはアジャンター第10窟やサーンチー大塔西門の最初期の初転法輪図と同様にブッダ最初の説法を聴いた五比丘の表現を避け、法輪に向かって合掌する四天王だけを背景に描き込んでいる。本図では、レリーフ中央に空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くという表現が見受けられ、アマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダにも見られる南インド特有の表現が確認された。ま

た大塔特有の表現としては、法輪中央に描かれた獅子によってブッダの獅子吼を表現する図像表現が挙げられる。後者は、画面中央に法輪柱を描き、地面に鹿を配することで鹿野苑における初転法輪を礼拝者に想記させる。すでにバールフットで描写され始めた法輪柱は、元は初転法輪伝説とは別の背景に基づいて図像化されたものであった。その後、サーンチー大塔南門では法輪柱の一番底辺に複数の鹿を配して、鹿野苑を暗示するようになり、制作意図の異なる図像表現へと展開する。これはサーンチー大塔から開始されたブッダの事績を象徴的に描く図像表現を大塔の下段レリーフ石板に辿ることが出来る一例である。

第5章《祇園精舎布施図と舎衛城の神変図》カナガナハッリ大塔の下段レリーフ石板に描かれた祇園精舎布施図は、その8箇所には碑文が残されている。バールフットの祇園精舎布施図ではコーサンバ堂と香堂のみが記されていたのに対して、大塔ではそれを継承しつつも、新たに井戸と経行処が描かれている。これら2つの建造物は南方上座部の律蔵中の『チュラヴァッガ』に記される15種の建造物のうちの2つと合致する。加えて、SN-10.6 (*Piṇḍarika*) に説かれるピヤンカラと母の姿が祇園精舎布施物語と無関係に本図の中に描き込まれている。これら付加された描写は、南方上座部所伝のニカーヤおよび律蔵に該当箇所が認められる。その他、舎衛城の神変図でも、南伝仏教特有のマンゴー樹の神変を表現するマンゴー樹が描き込まれている。マンゴー樹の描写は、それがバールフット、サーンチー大塔を経由してカナガナハッリ大塔へと伝播する様子が見て取れる作例である。

結論 カナガナハッリ大塔がサータヴァーハナ朝の第一段階（前1世紀-後1世紀）に西インドの上座部系仏教教団である雪山部の伝承を受容していることが確認された。さらに、それが第2段階（後2世紀初頃）に設置された上段レリーフ石板の仏伝図にも反映していることが明らかとなった。図像表現はバールフットや西インドの上座部系仏教教団の活動地域にあるサーンチー大塔の図像表現を色濃く継承し、文献資料では南方上座部のニカーヤに求めることが出来る。カナガナハッリ大塔は、仏教が西インドからスリランカへ伝播する伝承経路上に位置し、かつ西インドの上座部系仏教教団の活動地域に属していることが本研究によって明らかとなった。4世紀に成立した『島史』に述べられる伝承に基づけば、スリランカへの仏教伝来はアショーカ王の王子マヒンダによって仏教発祥の地マガダから直接伝えられたことになるが、この伝説は従来の研究によっても修正されている。このため、現在は仏教が西インドを経由してスリランカへ伝来したと考えられているが、その具体的な伝承経路はこれまで不明なままであった。新発見のカナガナハッリ大塔の研究によってその経路の具体的な一端が解き明かされた。

## 〔2〕 審査結果の要旨

インドのカナガナハッリ大塔は仏教美術の研究者からも、仏教学の研究者からも最近特に注目を浴びているが、本学位請求論文は、現存最古の仏教美術を伝える中インドのバールフット、西インドのサーンチー、南インドのアマラーヴァティを結ぶ中継地点に位置するカナガナハッリ遺跡の大塔について、特にサータヴァーハナ時代に設置された上段59枚の仏伝を描いたレリーフ中、特に5種のレリーフ石板について、下段1枚のレリーフも加えて、文献資料と図像表現の両面から別々に検討したものである。その結果、カナガナハ

ッリ大塔の仏伝レリーフの図像表現を文献史上・美術史上に位置づけ、伝承経路を次のように跡付けている。すなわち、カナガナハッリ大塔の仏伝レリーフの図像表現は、西インドの上座部系仏教教団であった雪山部と密接な関係を持ち、西インドの上座部系仏教教団の活動地域に位置するパールフトやサーンチーの図像表現を色濃く継承していることを指摘している。この点が本学位請求論文のもっとも顕著な研究成果といえる。

具体的には、第1章において21番と22番の2枚のレリーフを取り上げ、そこに表現されている雪山夜叉の帰依と尊者カッサパゴッタの駕籠での行進から、カナガナハッリにいかなる伝承が行き渡っていたかを解明しようとしている。レリーフ石板に付された碑文に書かれた「雪山の夜叉（ヤクシャ）たち」は、初期経典ではブッダによって教化されたとされるが、スリランカの歴史書『島史』では雪山地方に派遣された長老たちによって教化されたと書かれている。長老の一人には図像に付された碑文に出る「カッサパゴッタ」の名を挙げる伝承もあり、中西氏は、問題とする図像は雪山夜叉が尊者カッサパゴッタを礼拝している場面と解釈し、図像は初期経典の伝承とスリランカ史伝の伝承の間に位置づけられるとの説を提示する。カッサパゴッタなる人物は中インドのヴィディシャー地方から出土した舍利容器の碑文では「全雪山地方の師、善人カッサパゴッタ」と記されるが、中西氏はヴィディシャー地方に行き渡っていた伝承がカナガナハッリに伝播したものとみなしている。

さらにブッダの生涯を彩る様々なエピソードの中で、第2章ではシッダールタの誕生、天界からの灌水、誕生後に七歩歩んで宣言を行ったという伝説を描いたレリーフ石版、第3章ではシッダールタの出城と切られた頭髮に対する礼拝を描いたレリーフ石板、第4章ではブッダとなったシッダールタの最初の説法を描いたレリーフ石版、第5章では祇園精舎の寄進と舎衛城の神変を描いたレリーフ石版を取り上げて、それらの図像表現と文献資料を比較分析している。その結果、いずれのレリーフに描かれた内容も、現存文献では南方上座部が伝承するニカーヤと律蔵に特徴的な内容と共通することを指摘する一方、図像表現も時代的に先立つパールフトやサーンチー大塔の図像表現を継承し、さらにアマラーヴァティーやナーガールジュナコンダにも見られる南インド特有の表現が見られることを指摘している。本論文で取り上げた5種のレリーフの分析から明らかにされた知見から、カナガナハッリは、仏教が西インドから南インドへと伝わったという推定が歴史的事実であったことを実証する遺跡であり、仏教伝播の通過点に位置する遺跡であることが明らかになったとする。

このように本論文はインド仏教史の研究においても、インド仏教美術研究においても新知見をもたらす意欲的な論文である。本論文では特に取り上げられてはいないが、カナガナハッリ大塔はアショーカ王の肖像そしてサータヴァーハナ朝の王4人の肖像が刻まれるという、これまでにない画期的な特色を有する遺構であり、中西氏は果敢に仏塔の図像解釈に挑んでいる。ただし、本論文で選んだ素材は全体のごく一部であり、カナガナハッリ大塔の仏教図像研究の一端を披瀝したにとどまる。さらに、論攷の細部を見てゆくと、問題点も認められる。例えば、第1章の論述については、本論の出発点はあくまで図像資料であるので、まず図像表現を最初に提示し、碑文を手掛かりにして文献資料を探る方向へと展開した方が妥当であったと思われる。図像に表現されるカッサパゴッタが在家者の特徴を示していることはもっと力点を置くべきであった。碑文に出る「善人（sapurisa）」の

性格および有力在家信者による教化の問題へと繋がるからである。中西氏が重視する南方上座部のパーリ語ニカーヤには「説法師 (dhammakathika) の第一人者はチッタという在家者一族の長」(AN-I-26.5) といった文言もあり、能力の高い在家者の動向に目を向けさせる。さらに言えば、章のタイトルに「伝道図」と銘打っているからには、カナガナハハリ大塔に刻まれた他の伝道図の図像表現をどう考えるか、注記で簡単に触れるだけではなく、もっと踏み込むべきであったと考える。しかし、瞠目すべき知見を提示しており、今後の研究に大いなる可能性を秘めていることは疑いない。

先にも触れたが、本論文は上段59枚、下段76枚の計135枚にものぼるレリーフ石板のうち、わずか上段の5点と下段の1点についてのみの考察結果をまとめたものにすぎない。とはいえ、序論において中西氏が述べているように、この作業を積み重ねていくことによって、仏教の伝播過程に関する中西氏の見解を補強できる可能性が開かれているだけでなく、今後さらに「上段レリーフ石板の排列順序や、2回の設置時期がある上段レリーフ石板を分類する糸口の発見に繋がること」など、研究の拡がりをも期待させるものであることは確かである。さらに本論では、上段レリーフ石板(第1章～第4章)のみならず下段レリーフも第5章で取り上げているにもかかわらず、序論の記述は上段レリーフ石板に著しく偏っており、全体像を捉え難くしている。この序論をもっとうまく書けば、本学位請求論文の目的や意義を、より鮮明に伝えることができたのではないかと思われる。

また序論において今後の研究課題が列挙されている。(1) 第2期第1段階の上段2回目の設置以外に追加された上段レリーフ石板がどの程度あったのか。(2) 第2期第1段階の上段レリーフ石板の解明(3) バラモンであるサータヴァーハナ王家とカナガナハハリ大塔の仏教教団にどのような接点があるのか。(4) 大塔にブッダ像がなく、ブッダの身体的表現の導入がガンダーラ地方より遅れたことについて、世俗王権の宗教や習俗の差異のほか、仏教教団の差異の二つの観点からどう検討するか。(5) 大塔を活動拠点としていた仏教教団はどこか。これら多くの研究課題のうち、第2期第1段階の上段レリーフ石板の解明については、何の解明なのかが明確にされていない。また、その他の研究課題についても、本論においてその検討がなされるのか否か、また本論で検討されるのであれば、それが第何章に相当するのか、あるいは本論では検討が及んでいないが、現時点で気づいている問題点を単に並べただけなのかが明確でない。

最後に、結論に関わる点として、サーンチーが西インドの上座部系仏教教団の活動地域に位置しているという点が重要と思われるが、西インド、南インドといった地域が、本論文では具体的にどこを指すのか、といった基本的な点についても、序論で明確にしておけば、さらに的確な論述となったと思われる。ここで課題として指摘した諸点は、本論文の価値そのものを下げるものではないが、今後、本論文を公刊することも視野に入れ、論文の全体構成をもっとしっかり意識し、論旨を明確に伝える配慮をしていただきたい。

以上、評価されるべき点と課題点について述べたが、全体として本論文は、新出の仏教美術資料を基に、文献資料、それにこれまでの碑文研究の成果を十分にふまえた研究成果であるといえる。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判断する。